

膝

〔今俗呼字。知毛々。〕

〔倭名類聚抄手足〕膝 野王按膝音悉比、脛頭也。

〔箋注倭名類聚抄手足〕今本玉篇肉部同說文、鄰脛頭節也、釋名、膝伸也可屈伸也。

〔類聚名義抄肉〕膝音悉ヒサ

〔倭訓采前編二十五〕ひざ 膝をいへり引るざるの義なるべし、物に小膝といふ事見えたり、佛者の右膝著地は胡法かといふに、樂記に臥坐致右ヒザマツとあれば三代も亦此禮ありと、濟北集に見ゆ、倭名抄に膝ヒザをひざのかはらとよめり、今ひざ、らといへり。

〔物類稱呼人倫〕膝ひざ 豊州にてつぶしといふ、中國にてはひざのさらといふ、薩摩にてひざつぶしと云、奥州南部にてひざかぶと云、越後にてぶゑやかぶといふ。

〔古事記垂仁〕爾沙本昆古王謀曰、汝寃思愛我者、將吾與汝治天下而卽作八鹽折之紐小刀、授其妹曰、此以小刀刺殺天皇之寢故天皇不知其之謀而枕其后之御膝爲御寢坐也。

〔古事記下清寧〕爾山部連小楯任針間國之宰時、到其國之人民名志自牟之新室樂、於是盛藥酒酣以次第皆饌、故燒火少子二口、居竈傍、令饌其少子等、爾其一少子曰、汝兄先饌、其兄亦曰、汝弟先饌、如此相讓之時、其會人等、唉其相讓之狀、爾遂兄饌訖、次弟將饌時、爲詠曰、○中所治賜天下、伊邪本和氣天皇之御子、市邊之押齒王之、奴末爾、卽小楯連聞驚而自床墮轉而追出其室人等、其二柱王子、坐左右膝上、泣悲而集人民、作假宮、坐置其假宮而貢上驛使、

〔日本書紀天智二十七〕七年明齊十二月、高言、惟十二月、於高麗國寒極凍、故唐軍雲車衝棚、鼓鉦吼然、高麗士卒膽男雄壯、故更取唐二壘、唯有二塞、亦備夜取之計、唐兵抱膝而哭、銳鈍力竭而不能拔、筮牘之耻非此而何、

〔本朝世紀〕寛和二年六月十日丁未、次少外記光輔、率神祇史一人、入自同門、並立案前外記東神祇西、